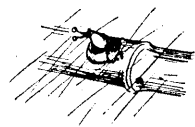


幼稚園の社会

高橋省巳



一、問題の所在

「幼稚園の社会」というとき、まず第一に、問題が二つあると思われる。その一つは、小学校や中学校では「社会科」という教科があるが、これとどんな関連があるかということである。その二つは、幼稚園教育内容として「六領域」というものがあるが、その一領域としての社会は、他の領域とどのような関係をもち、指導としてどんなことを分担し、注意しなければならないかということである。なお、この二つの問題の外に、現在、幼稚園の社会として指導されるものについての反省すべき事項はないかということも問題となるであろう。

二、「生活としての社会」と「教科としての社会」

第一の問題についての結論を先に記すと、小・中学校の「社会科」は「教科としての社会」であるが、幼稚園の「社会」は「生活としての社会」であると表現すると、その特徴がはっきり把握され

るように思う。もちろん、両者は別個なものではなく、深い関連があることは言うまでもない。小・中学校の教科学習が生活指導を度外視して行なわれるべきものではないからである。

わが国における社会科は、戦後アメリカの社会科の影響をうけて、戦前におけるこの種の教育が根本的に組織替えされ、わが国社会の民主化のために重大な使命を持つ教科として登場したのである。すなわち、わが国の政治、経済、文化の三方面的の生活の中には前近代的なものが介在しているのであるが、この非近代性を克服して、個人の基本的人權を尊重し、自由を確立することを目標としたのであった。この目標のもとに、児童・生徒に社会生活を正しく深く理解させ、その中における自分の立場や位置を自覚させることによって、その社会に適応し、社会の進歩のために尽力させるように指導することにした。そして児童・生徒の成長発達に應ずる目標を設定し、その指導内容を明示し、指導上の留意事項をかかげてい

る。これを見ると、決して知識の獲得や理解ということにだけ終始するのではなくて、生活実践と結びついているように指導されねばならないとされている。それにしても、成長発達に應ずる行動圏の拡大と知的発達に應ずる認知構造の転換によって、上級になるに従って次第に知識と理解が豊かになり、態度、習慣、技能を発展させるように企図している。教科書による教材が豊富になると共に、社会科を構成する教材領域がまとめられて指導されるようになっていく。

ところが、幼稚園の社会は、このような教科的知識や実践ではなくて、文字あるいは文章上の理解が困難な幼児期の特性にかんがみて、あくまで生活実践に徹しなければならない。このような指導であればこそ、「社会科」ではなくて「社会」とよばれるのである。また、そうあらねばならない。幼稚園の社会は生活実践の指導であって教科指導ではないのである。もちろん、知識をゆるがせにするものではない。幼児ながらも、その知的発達に應ずる知識と理解と洞察を身につけさせることが大切である。しかし、それは自然な生活指導の姿で、社会のねらう内容を獲得させるよう留意されている。生活、あるいは経験による学習である。

三、「経験の領域」と「領域の経験」

次に、第二の問題である領域「社会」は六領域といわれる他の領域と、どんな関係において理解され指導すべきかが問題となる。

これは幼稚園教育要領がまとめられるころに、よく論議された。

すなわち、幼稚園教育というものは、学校教育法第七七条にかかげられた「幼稚園教育の目的」を実現するために、第七八条の「幼稚園教育の目標」としてあげた五項目を、教育実践として如何に展開するかにあることは言うまでもない。そこで、幼稚園教育要領は幼稚園教育の目標である五項目について、更に「具体的な目標」として、五項目のおおのについて展開した。しかし、「幼稚園教育の目標」の五項目が、そのまま「具体的な目標」の五項目として展開されているのではない。具体的な教育指導というものを頭において、整理され、明瞭化されている。社会について言えば、幼稚園教育の目標としてかけられた次の二項目、すなわち、

- (2) 園内において、集団生活を経験させ、喜んでこれに参加する態度と協同、自主及び自律の精神の芽生えを養うこと、
- (3) 身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと、

というのが、「具体的な目標」においては、
(2) 幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようにするというように、整理され明瞭化されている。

これを「幼稚園教育の内容」とする時に「社会」としてまとめられているのである。これが領域「社会」であるが、幼児の発達上の特質を考えて、「社会の望ましい経験」として八項目がかかげている。これが「有効適切な経験」というのである。

領域社会のこの望ましい経験は、さきにかかげた具体的な目標で

ある領域社会において、幼稚園教育の目的を実現させるための望ましい経験という意味である。すなわち、形の上では「領域の経験」というようになっていく。しかし、これは「領域の経験」というような発想の仕方ではなくて、「経験の領域」というような発想の仕方ではなければならない。これは単なる用語の問題ではなく、発想の仕方の問題になるので、幼児教育を理解する上での重要な点であると思われるのである。

すなわち、「領域の経験」という時には、具体的な目標に従って幼児の経験に「制限」をつけるということになる。そうではなくて、こんな目標や領域とは関連なく、幼児はその欲求と興味に従っていろいろの活動をしている。しかし、そのいろいろの活動には、教育の目的に照らして望ましいものと望ましくないものがある。そこで、幼稚園の「具体的な目標」に照らして、望ましいものは何かという観点から幼児の経験をまとめると、「経験の領域」というものとなるのである。

これは教育観を幼児の行動を中心に行っているのか、教育目的を中心に行っているのかの観点の相違のあらわれるところである。「領域の経験」ではなくて、「経験の領域」でなければならぬ。

「領域の経験」ということになると、行動を限定することになるが、「経験の領域」というと、幼児の展開する無限の経験のうち、これこれを「社会」という名称でまとめたに過ぎないということになる。これが社会の経験、これが自然の経験というのではなくて、こ

れこれの経験をまとめると「社会」になるし、これやあれやの経験をまとめると「自然」になるというような考え方をすべきである。と考える。したがって、領域別は便宜的なもので、固定的ではない。どの目標を達成するためにこの経験が望ましいというような指導ではない。このような発想法をしなければ、幼稚園の社会は「教科としての社会」になって「生活としての社会」にはならない。望ましい幼児の経験というものは、渾然一体となって五つの目標が全体として達成されるようなものである。もちろん、ある行動、あるいは経験は五つの目標を均等に達成するというのではなくて、おのずから濃淡がある。幼児の具体的な生活経験は六領域全部にわたっていなくても、常に幾つかの領域にわたっているものなのである。殊に社会はそうになっている。

したがって、領域「社会」は教科「社会」、あるいは教材「社会」、あるいは「領域の経験」ではなくて、生活「社会」であり、経験「社会」であり、「経験の領域」である。したがって、他の五つの領域と、濃淡・広狭いろいろな程度で交錯しているものと考え、社会の指導は幼児の生活全領域にわたっているとも言える。

四、教育内容「社会」

領域「社会」の望ましい経験は八つにまとめあげられているが、前項のように考えると、望ましい経験は八つに尽きるものではない。幼稚園における幼児の生活は、幼児の全生活の一部分である。大部分は家庭、あるいは父母の膝下にある。幼稚園の教育を効果あ

らしめるためには、幼稚園の教育目的、あるいは目標に照らして整理する必要がある。この有効適切な経験として八つあげられている理解解すべきであろう。

ところが、望ましい経験としてあげられた八項目を羅列的に理解するのではなく、自分のものとして理解するには、自分ながらの観点に立ってまとめることが大切である。

「社会」であるから、集団生活とか、社会生活とかいうことがばか書いてあるが、幼児の発達の特徴と教育目標とを考えあわせるとき、集団生活、社会生活といっても、この生活へはいるための基礎的能力として、自立性ということを一に考えねばなるまい。自分でできることは自分でし、他人に依存しないということである。基本的自立の生活習慣というものが身につけられねばならない。この習慣の形成は幼稚園の社会指導としては最も基礎的なものである。

わたくしは「自立性」と「自主性」を区別している。自主性ということとは、自分で考え自分で判断し、自分のやったことに対して責任をもつということである。このように言えば、非常に抽象的な表現となる。そこで、この抽象的な理念を、具体的な生活実践と結びつけるところに、自立性があると考えるのである。幼児期のしつけとして最も大切なことである。食事・睡眠・衣服の着脱・排便・清潔について自立性を身につけるといことは、やがて自主的になる心理的教育的基盤となる。

第二は公共性を身につけさせることである。公共性ということの

中には、自分勝手なことをせず、他人に迷惑をかけない、規則を守り、公共の物や設備を大切にすることとも入れる。公德心を養うことも公共性の一面であると考え、やがてこれは身辺の社会生活に関心を高めさせることになる。公共性の高次の段階として「公共の福祉のために尽す」ということは幼児期にはむずかしいけれども、指導者はその芽生えを育てよう留意することが大切である。

第三は協同性である。協同性というのは、他人との協調ができるということ、他人の立場を理解し、仲よく助けあい、しごとや遊びを通して協力するだけではなく、自分たちの属する集団生活を向上させるよう努力することである。集団生活の向上ということ、
「われわれ意識」の発達していない幼児期には困難である。しかし、幼児にも幼児なりに、自分の属する家庭生活において、園の生活において、友だちとの生活において、寄与するものがあるはずである。

五、社会指導の反省事項

幼稚園の社会として指導されているもので根本的に反省されることは、幼児の生活行動について、もっと観察資料を集めるという努力がされていらないのではなからうか。その着意すらないのではないかと疑われる。年齢による差、地域による差、伝統による差があるので、この観察資料に立脚して社会の指導をしてこそ、はじめて十全といわれるべきである。(神戸大学教育学部教授兼付属幼稚園長)